

インディラ・アクション

呼びかけ人：リテラジャパン 西澤真理子

■ 設立趣旨

仙台市の知的障害者たちの作った「レトルトカレー」が、中国の天洋工場で加工された牛タンを使用した、という理由で自主回収され、多額の損害を被っています。昨年の12月以降に製造されたものは別の工場で加工された牛タンを使って作られましたが、それについても、消費者の不安を背景に販売を自粛しています（参考記事参照）。食べても問題ないものを、このまま捨ててよいのでしょうか。

「わらしべ舎西多賀工房」は現在、12月以前に製造され回収されたカレー約100袋、12月以降に別の工場で製造された600袋、計700袋程の在庫を抱えています。このカレーは、事件前には毎月800袋が完売されていた人気商品です。この度、これらのカレーの在庫をみんなで買い取ろうと「インディラ・アクション」を立ち上げました。

■ 支援方法

昨年12月以降に製造され、天洋工場とは別の工場で加工された牛タンを使用した600袋のレトルトカレー、通常価格一袋（一人前250g）800円を、わらしべ舎西多賀工房は今回、半額の400円で提供することにしました。これをできる範囲で買い取ることです。なお、送料（全国一律450円）は別途各自がご負担ください。ご注文は直接わらしべ舎へお願いいたします。皆さんのあたたかいご支援をお待ちしております。

■ わらしべ舎概要

<http://www.warashibesha.com> *他の商品は通常通り通信販売しています。



■ ご注文とお問合せ先

社会福祉法人 わらしべ舎地適法会社授産施設 わらしべ舎西多賀工房

担当 小野さん

電話 022-307-6320 メール info@warashibesha.or.jp

参考記事：毎日新聞 2008年2月2日付記事

中国製ギョーザ：障害者授産施設が商品を自主回収 仙台

中国製冷凍ギョーザによる中毒事件の影響で、仙台市太白区の知的障害者授産施設「わらしべ舎西多賀工房」が、通所者手作りのレトルト牛タンカレーの自主回収を余儀なくされている。冷凍ギョウザの製造元である中国の「天洋食品」が製造した牛タンを使っていたため、昨年2～11月に製造した約3000個を回収する。小野惇夫(あつお)施設長は「安全・安心を掲げて店をオープンしたので心外。通所者もがっかりするだろう」と肩を落としている。

2日、職員たちは購入者への電話連絡や、当面の販売休止を知らせる張り紙の作成に追われた。牛タンカレーは、授産活動の一環として、仙台の特色を生かした特産品をと、06年12月から施設が運営するレストランで製造を始めた。少しずつ人気が出て、最近では月に約800個製造していた。近所の住民が買っていきほか、インターネットでも注文を受け付けていた。

冷凍ギョウザ事件を受け、仕入れ先に確認した結果、同じ工場の製品を使っていた時期があったことが分かった。仙台市に相談したところ、食品各社が同工場の製品の自主回収に踏み切っていることもあり、回収を指導された。

昨年12月以降に製造したカレーは、中国の別の工場から仕入れた牛タンを使っているが、消費者の不安に配慮し、2日から販売を全面的に自粛した。小野施設長は「今の食材に問題はないが、やむを得ない」と話す。再開のめどは立っていない。

工房は社会福祉法人「わらしべ舎」が運営している。19～38歳の通所者34人が就労訓練として調理からレトルトのパック詰めまでを一貫して行っている。食材は国産にこだわってきたが、唯一の中国製品である牛タンが事件の起きた工場の製品だった。

回収している商品は250グラム入り800円。週明けにも、購入者を直接訪ね、おわびに回るという。施設の通所者は04～07年、障害者の職業技能を競う「アビリンピック」の喫茶サービス部門に県代表として参加したことがあるなど、本格的なカレー作りと質の高い接客が評判だった。【山寺香】

<http://mainichi.jp/select/jiken/gyouza/news/20080202k0000e040060000c.html>

参考までに、ヤマト福祉財団創設者の故小倉昌男氏の著書、「福祉を変える経営：障害者の月給1万円からの脱出」（2003、日経BP社）によると、日本の障害者の賃金は月に1万円に満たない状況があります。